

7) アカシア

アカシアはマメ科アカシア属(*Acacia*)の総称で、日本で一般にアカシアと呼ぶものはハリエンジュ属(*Robinia*)のニセアカシアを指している。このためかアカシアのことはミモザといい、ハリエンジュ属のニセアカシアのことをアカシアと呼ぶようになった。しかしこれはともに誤用である。というのはミモザは地中海沿岸で栽培されるフサアカシアのことで、これも分類学的には正解ではないからである。もともとミモザはオジギソウ属(*Mimosa*)のことで、アカシアとはまったく別個のものなのである。大変ややこしい話ではあるが、ここでは本物のアカシアから始めることにしよう。

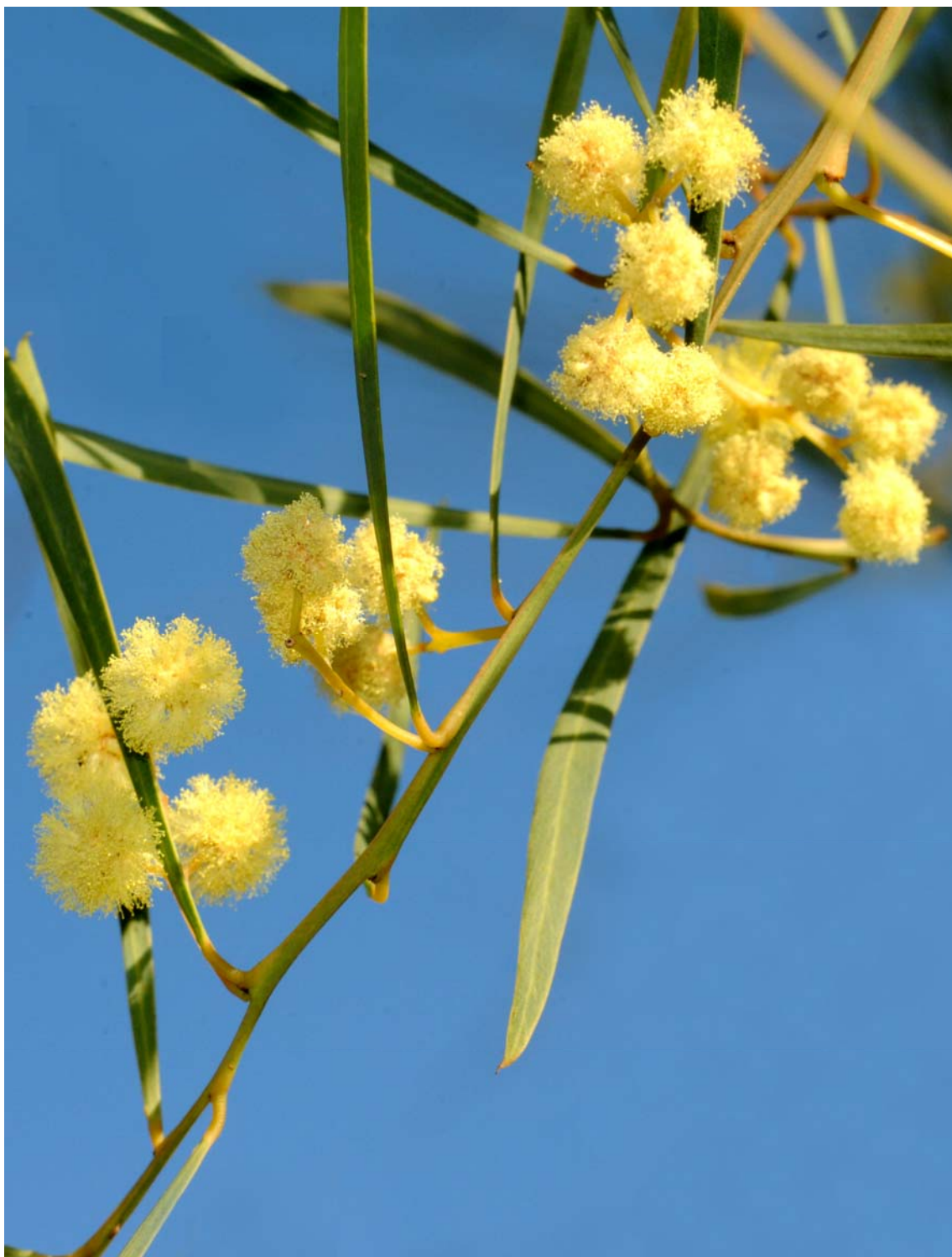
アカシア属はオーストラリアに多く 400 種ほど分布し、このほかにはアフリカや、アメリカなどの亜熱帯に 250 種ほど、合わせると約 650 種になる。原産地はどこも温暖な地域のために耐寒性のある品種は少なく、また日本に自生するものはない。このため関東以北で育てるのは難しいものの、鮮黄色の花は3月の初には開花するのでよく目立つ。関東近辺では鎌倉の市役所のそばに 3m ほどの立派なアカシアの木があり毎年見事に花を咲かせている。日本で見られるアカシアはフサアカシア、ギンヨウアカシア、キンゴウカン、モリシマアカシア、ソウシジュなどである。このうちフサアカシア、ギンヨウアカシアは関東以西の温暖地であれば、なんとか栽培できるが、キンゴウカンは温室内でないと越冬できない。しかしキンゴウカンは鮮黄色の花も美しく、強い芳香があるために香水の原料にされている。また樹皮からはタンニンもとれるので、暖地ではよく栽培されている。モリシマアカシアはオーストラリア原産で、日本では暖地で緑化樹とされている。ソウシジュは『想思樹』と記し、原産地はフィリピンで、日本では沖縄などで栽培されている。これは成長も早く 20m に達するうえに、材は緻密で堅いことから、建築、車両や船などの用材として使用され、桶や家具などにも用いられている。しかしアカシアで最も大事なものは、アラビアゴムと呼ばれている樹脂であろう。西アフリカ原産のアラビアゴム、アラビアゴムモドキなどから採取されるガラス状の樹脂で、接着剤として用いたり、乳化剤、結合剤、医療用の粘滑剤などとして用いられる。またこの若葉を食用にするところもあり、今でも非常用の食料として大事な役割を果たしている。

古代エジプトの女神で太陽の母、万物の創造神として信じられていた『ネイト』(Neith) は、エジプトの神々の中でも最も古い神の一人とされている。先王朝時代にはすでに西デルタ地方において信仰の対象となり、その本拠地はサイス(Sais)であった。この神は赤い王冠をかぶり、2匹のワニを従え、弓矢を持った姿でしばしば登場するのだが、アカシアの樹を棲み処にしていたと伝えられている。そういえばアメリカの西部開拓者もこの木で家を造ったといわれ、シーダー類が用材として広く用いられるまでは、たいせつな建築用材だった。

古代メソポタミア南部、シュメールの都市『ウルク』(Uruk=旧約聖書ではエレク

=Erech)では、守護神である女神『イナンナ』(セム語では『Is tar』=イシュタル)のご神木とされていた。『イシュタル』は古代メソポタミアのアッシリア、バビロニア地方で崇拝されていた女神で、西セム族フェニキアの女神『アシュタルテ』と同一のものと考えられている。この神は天体神としては『金星』を現わすものとされていた。しかしアッシリア、バビロニアに伝わる『タンムーズ神話』では、冬には死んで春には蘇る植物神タンムーズを追いかけて、冥界まで下る女神として描かれている。一方『ギルガメッシュ叙事詩』では、英雄ギルガメッシュを誘惑して拒絶されると、戦争を起こす戦闘意欲の旺盛な女神として崇拝されている。異民族の攻防が相次いだこの地方では、そんな好戦的な女神が欠かせなかったのであろう。アカシアは成長が極めて早く有用であったために、こうした人々の信仰とも結びついて生命力の象徴とされ、特に大事にされていた。またこの地方では材としての樹木が乏しかったために、他の地方にも増してこの樹木の材は重要であった。

一方アカシアは古代イスラエル人にとってはシツタといわれる聖木であった。モーゼの『十戒』を納めたといわれる『契約の箱』は、この木を用いて作られたといわれ、キリスト教では不死の魂の象徴となっている。モーゼは古代イスラエルの指導者で、B.C.1280年頃イスラエル民族を率いてエジプトを脱出。シナイ山において神ヤーウェとの『契約関係』に入り、ヤーウェの民になったと伝えられている。本来契約とは法的概念だったが、これを宗教的な思想として発展させたのは彼らイスラエル人であった。聖書において神の審判である大洪水の後の、人類と自然と神との調和を物語る『ノアの契約』、子孫増加に伴う土地の授与を約束した『アブラハム契約』、ダビデ王朝の永続を約束した『ダビデ契約』などに見られるように、神と人との関係を、契約という形で捉えられたところに大きな特徴が見られる。特にエジプトを脱出したイスラエルの民が、シナイ山にて神と結んだ契約は『シナイ契約』といい、『十戒』を核とするその内容は、後のユダヤ教の基礎となった。また旧約聖書の『出エジプト記』に記されている、他神や偶像の崇拝を禁じ、殺人、姦通、窃盗を禁止するなどの道德律は、後のユダヤ教やキリスト教の基本理念となった。『契約の箱』は『Ark of the Covenant』と記されて別名『律法の箱』とも言われ、モーゼの十戒が刻まれた2枚の石版が納められていた。これは神ヤーウェとイスラエルの民との間で結ばれた契約に基づく『掟』でもあったから、このように呼ばれたのである。箱の長さは1.3m、幅と深さは79cm、金の箔板で覆われていた。その後モーゼとイスラエルの民は、カナーンの土地に向かって、40年間も荒野を放浪するのだが、この箱はその間ずっと司祭によって運ばれたという。因みにカナーンは神ヤーウェが、彼らの先祖アブラハムに与えると約束した土地だった。しかしモーゼは困難な旅の途中で、イスラエルの民から不信をかい、カナーンの地に入ることを許されなかった。彼はヨルダンの対岸からカナーンの地を眺めながら、この世を去ったと、旧約聖書は今日に伝えている。



2016年冬は正月から春を思わせる暖かさだったためか、成人の日にこのアカシアが満開になった。品種名はハッキリしないが、葉が対生しており、**羽状複葉**ではないところから、相思樹(ソウシジュ)ではないかと思う。というのはギンヨウアカシアも、キンゴウカンも、モリシマアカシアも羽状複葉だからである。実はソウシジュも羽状複葉なのだが、羽状の部分は早く脱落して葉柄のみが残って、このように対生状に見えるのである(さいたま市浦和区)。



ギンヨウアカシアの花、関東では珍しい部類の木である。しかし3月下旬から4月上旬頃注意して歩いていると、意外と多い木でもある(埼玉県杉戸町)。



ギンヨウアカシアの花。鎌倉市役所のそばに比較的大きな木がある(さいたま市浦和区)。



エリカの花はアカシアによく間違えられるが、こちらの方はツツジ科になる。

[目次に戻る](#)